新領解文に思う（和讃をいただいて）

私が初めて和讃を知ったのは、小学生の時に十二禮をお勤めし、最後に恩徳讃を唱和した時だったと思います。

如来大悲の恩徳は
身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も
骨を砕きても謝すべし

なんと過激な言葉なんだろうか、こんなこと言っていいのかと疑問に思いました。

これが親鸞聖人が作られた和讃の一つであることを知ったのはだいぶ先のことです。

やはり聖人様が生きておられた時代を考えますと、骨を砕きても惜しくないほどの有難さである、ということなのではと考えられます。

そもそも和讃はなぜ作られたのでしょうか？

お経は中国から伝わったもので漢字ばかりで、僧侶もしくは教養の高い人達にしか理解できなかったのではないでしょうか。それをわかりやすく七五調のリズムで仮名を交えて作り始めたのが平安時代の中頃の源信和尚だったといわれています。

親鸞聖人はこれを独特の形にして民衆にも浸透するように作られたのではないかと想像します。聖人は七十六歳の時、浄土和讃、高僧和讃を二百五十首御作りになられ、八十五歳までに正像末和讃を付け加えておられます。

その後も新しい和讃を付け加えられたり、言葉の直しや、和讃の配列を直されたり、どうしたら民衆の心に響くだろうかと苦悩し考え続けられたのではないかと想像いたします。

三年間のコロナ禍により、コミュニケーションがなかなか取りにくい時期に，本堂に月一で先人たちの心休まる言葉を書いて張り出してきました。

今は七高僧の和讃を書いています。和讃を読んでいきますと、聖人の表現力の豊かさに気付きます。

そして日本だけにとどまらず、世界全体を感じるような、地球全体をかんじるような、時代も超越した大きな御心で御作りになっておられるようにおもうのです。

又反対にその時代の無学文盲の民衆にわかりやすいように、工夫を凝らしていろんなものに例えながら煩悩具足の我らと菩提の境地をお示しくださってます。

「氷と水」、「大悲大願の大海」、「弘誓の船」としたり、又今よく取り上げられるジェンダー平等も取り上げておられるし、聖人の視点がとても広く細やかで、本当に有難く思います。

私たち煩悩具足の凡夫であるがゆえに、どうしようもないその理由のために、阿弥陀様は本願を起こされたのです。

そのことををお聖人様は何年もかけて、手を変え品を変え、心細やかな表現でお教えくださっておられます。

この度、本願寺より新しい領解文が出されました。

それを読ませていただきました時、とても違和感を感じました。

あまりにも簡略化され、単調な言葉が並んでいるだけと感じたのです。そして、これを皆で唱和するするとのことですが、どこまで心に響くのでしょうか？とても疑問に思います。

もっともっと時間をかけ、沢山の方の知恵を頂き、聖人の姿勢に恥じぬよう、今を生きる私たちために今の言葉を駆使してデリケートに表現しなくてはいけないのではないでしょうか。

今の時代の複雑な情勢に敏感に呼応する言葉をぜひとも探していただきたいと思います。

合掌

本徳寺坊守　大谷美子